

期待される教師

An article about the prospective teachers

藤井 千恵子

Chieko FUJII

1 指導行政・管理職の視点から

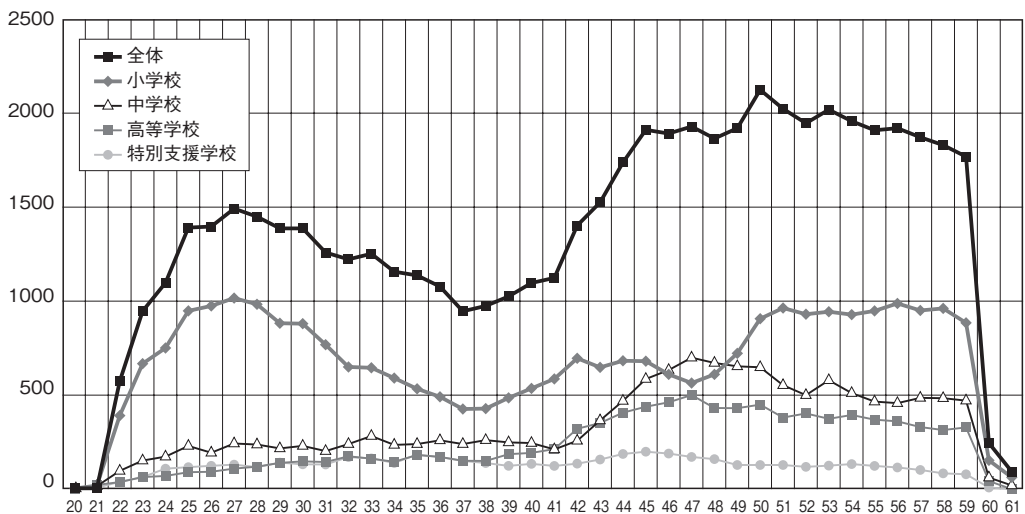
(1) 教員の資質・能力の向上

指導行政や管理職は、学校が地域の子どもたちに最善の教育を行うところであることを切に願っている。そのために、教育課程の編成を行い、意図的・計画的に教育活動を実施している。しかし、適切な教育課程を編成し、立派な学校経営計画の方針を立ててもそれを具現化する教員がいなければ実現は不可能となる。日々、子どもたちの前に

立ち指導する教員の資質・能力を向上させることは、指導行政及び管理職の大きな課題である。

グラフ1に示したように、東京都の教員の年齢構成は50歳代の層が最も多く、次いで20歳代となり、学校の中核となる30歳代から40歳代前半の人数は少なくなっている。さらに、今後10年間、毎年2千人規模の退職者がおり、したがって新規採用者も増加することとなる。特に、小学校の教員にその傾向が大きい。

かつて勤務していた小学校で、1年生の保護者



グラフ1 東京都公立学校教員年齢分布（平成20年5月1日）

から「わが子の担任はベテランの先生にしてほしい」との要望をいただいたことがある。子どもの教育に対する期待の表れであるが、限られた人的資源の中、すべての学級に力量のあるベテラン教員を配置することは難しい。初任者教員にも大きな期待がよせられており、管理職や指導行政としての教育委員会は、たとえ1年目であろうともベテラン教員と比較して遜色のない授業を行うことができるよう支援をしていかなければならない。

これらの状況から、若手教員をはじめとした現職教員の資質・能力の向上は、学校にとって喫緊の課題となっている。

(2) 求められる教師像

それでは、どのような教師が求められているのだろうか。

中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する」（平成17年10月26日）では、教師に対する揺るぎない信頼を確立するために、質の高い教師を養成・確保することが不可欠だとして、あるべき教師像を明示している。

① 教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感、常に学び続ける向上心など

② 教育の専門家としての確かな力量

子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業づくりの力、教材解釈の力など

③ 総合的な人間力

豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質、教職員全体と同僚として協力することなど

教員が身に付けるべき力

教員が身に付けるべき4つの力

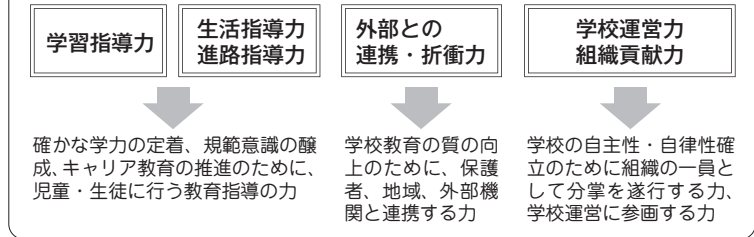


図1 教員が身に付けるべき力（東京都教育委員会 OJTガイドラインより）

東京都教育委員会では、10月に「教員人材育成の基本方針について」を公表した。そこには、「教員が身に付けるべき力」（図1）が示されている。注目すべき点は、「外部との連携・折衝力」や「学校運営力・組織貢献力」である。先に述べたように、様々な職務を若手の教員も担わざるを得ない状況となっている。若手、ベテランを問わず全ての教員に「学習指導力や生活指導力・進路指導力」のみならず学校組織の一員であることを自覚し、学校を支える力を身に付けることが期待されている。

(3) 現職教員の研修体系

教員の資質・能力を向上させるため、東京都教育委員会はキャリアに応じた研修体系を確立している。図2のように経験年数や職層によって研修を受講できるようになっている。

これらに加えて、5年目から10年目の教員を対象とした「東京教師道場」、小学校の教員を目指す大学4年生を対象とした「東京教師養成塾」、高校3年生を対象とした「東京未来塾」などの特色ある研修も実施している。

しかし、このような体系的な研修を用意しても、それを受講する教員の内発的な意欲がなければ資質・能力を向上させることはできない。よりよい授業をしたい、そのための力を身に付けたい、望ましい学級集団を育てたい、組織としての取り組みについて学びたいと願う意欲や向上心が力量形成のポイントとなる。

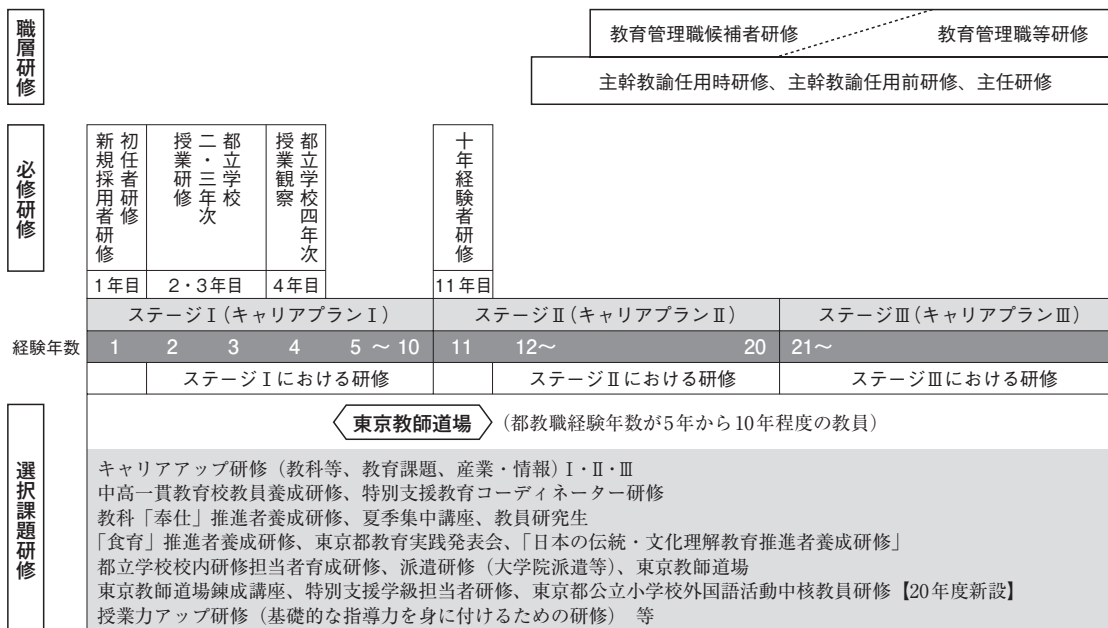


図2 東京都教職員研修センター「現職研修体系」(平成20年度)

2 教科教育の視点から

(1) 学ぶことの意味と価値を伝える

小学校3年生では、「昆虫の成長と体のつくり」を、例えば「モンシロチョウ」の観察を通して学習する。

この学習を通して、モンシロチョウだけでなく他のチョウも同じように一定の順序で成長するという自然の摂理、サナギから羽化する瞬間の生命に対する感動など、自らが飼育し、その様子を自らの目で観て初めて実感を持った理解が可能となる。また、生き物に対する愛着や畏敬の念、自然の造形美に対する感動や憧れも学ぶことができる。単に知識を覚えるための学習にとどまらない。子どもたちが、身近な自然に触れ、自然を見る目を養うことは、「今まで見えても見えなかった対象」に気付くこと、科学的な見方や考え方を身に付けるということである。

教員には、すべての教科等の指導において、「なぜこの学習をするのか」「何を子どもたちに育てたいのか」「何を伝えていきたいのか」といった

学習の意味と価値を問い続けることが求められている。

(2) 子どもを知る

研修を積み重ね、指導内容を調べたり、学んだりするが、それだけでは授業を行うことはできない。指導しようとする子どもの実態を踏まえ、どのような教材・教具を用い、どのような発問を行い、学習を展開するかが重要だからである。そして、子どもの実態把握に努めることが必要である。

◇学力の実態

現在、多くの自治体では、学力に関する調査(国語、算数・数学を中心とした調査)を実施している。また、学習状況調査(例えば、「朝食をとっているか」など)も実施し、学力との相関関係について考察している。

理科・数学の調査もが実施されており、ここではその一部について紹介する。

① OECDで実施しているPISA調査では、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について調査している。その結果、日本の科学的リテラシーについては、上位グループに

属しているものの全体としては、読解力や記述式問題に課題があり、成績分布においても中位層が減り、低位層が増加していること、無回答率が高く、学習意欲やねばり強く課題に取り組む態度に個人差が広がっていることなどが明らかになった。

- ② 国際数学・理科教育動向調査（TIMSS調査）では、得点では過去の調査と比較してもほとんど変化はみられないが、数学や理科が好き、楽しいと回答する割合は参加国の中で低く、また、テレビやビデオを見る時間が長いことなどが明らかになった。
- ③ 文部科学省が実施した「全国学力・学習状況調査」の算数・数学では、基礎的・基本的な知識・技能は相当数の子どもたちが概ねに身に付けているが、意味の理解や情報の活用、説明等については課題があることが明らかとなっている。
- ④ 文部科学省で実施した「特定の課題に関する調査」における算数・数学では、日常事象の考察に算数・数学を生かすことや論理的に考えることなどの数学的に考える力に、理科では、問題解決するための観察・実験の方法を考えたり、結果等を基に考察を深めたりすることなどにそれぞれ課題がみられた。

これらの調査結果は、貴重な指導資料の宝庫である。学校や学級の傾向を把握し、指導計画に反映させたり、一人一人の子どもに必要な具体的な手だてを検討したりすることができる。また、学習状況調査結果にも目を向けることによって、学習意欲や家庭学習等に対する手立ても工夫することができる。

学力の実態を知ることは、教員としての授業に対する心構えを見直し、改善するなど授業の質的な転換を図ることにつながる。

◇運動能力の実態

小学生以上の「体力・運動能力調査」については、文部科学省から報告書が出され、テスト項目とその結果及び考察が示されている。ここでは小学校に入学する前の5歳児の運動能力調査のデー

タについて紹介する。

東京都教職員研修センターでは、昭和55年（当時は都立教育研究所）から3年ごとに東京都公立幼稚園に在園する5歳児を対象に運動能力調査を実施してきた。平成19年度は、10回目の調査となった。（平成19年度研究紀要「第10回東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究」）

- ・調査対象園児 65園 5歳児 2,400名
- ・実施時期 平成19年10月から11月まで
- ・調査内容
25m走 立ち幅跳び ソフトボール投げ
体支持持続時間 両足連続跳び越し

以下に比較データ（グラフ2）を示す。グラフは、それぞれの調査の平均値の推移と昭和55年度の結果を100とした指数の変化を表したものである。

園児の運動能力については、依然として低下傾向が見られた。特に、男児・女児ともに「体支持持続時間」は、昭和55年度の値と比較して約60%の値まで低下している。また、「ソフトボール投げ」は、男児・女児ともに個人差が大きい種目であることがわかった。

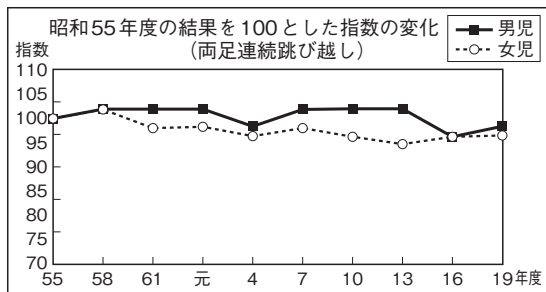
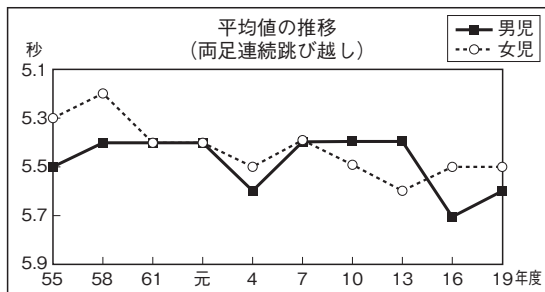
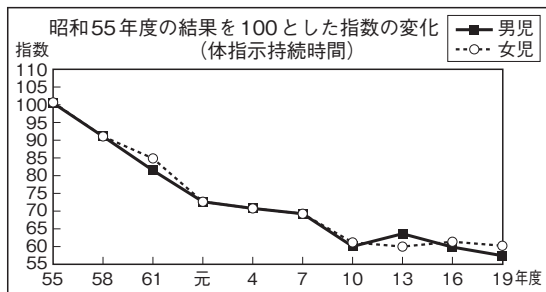
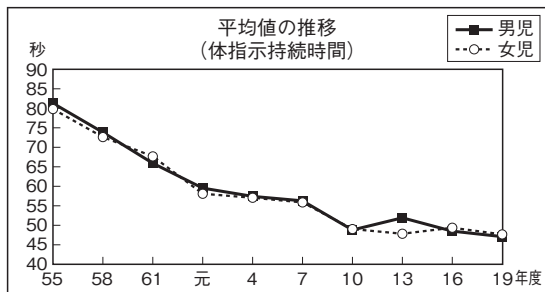
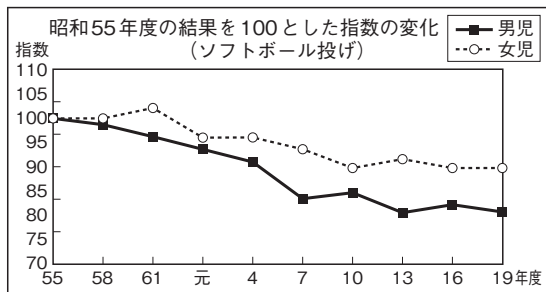
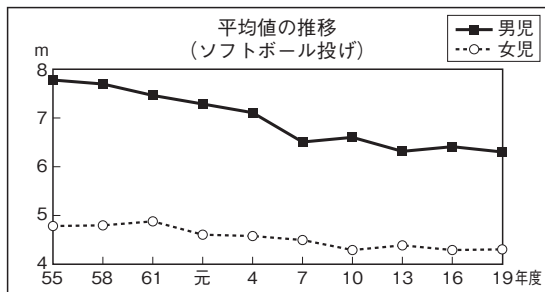
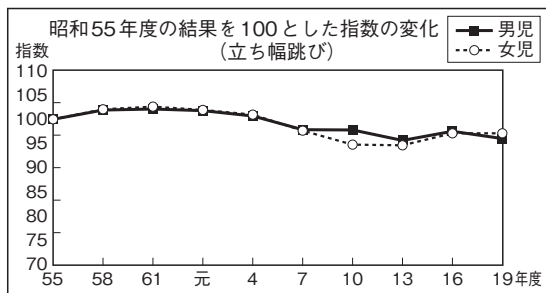
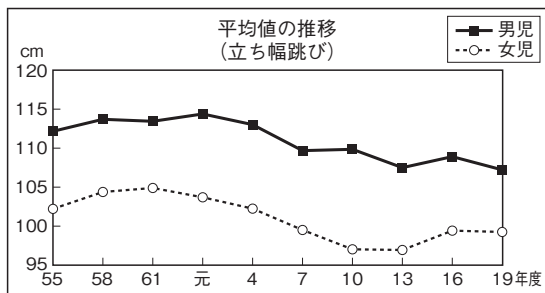
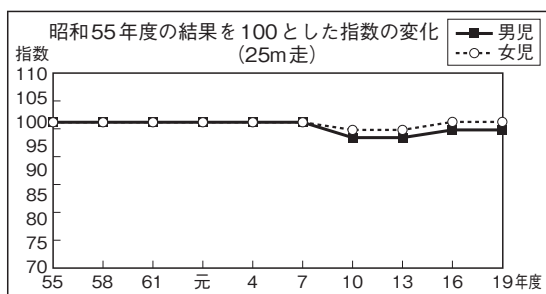
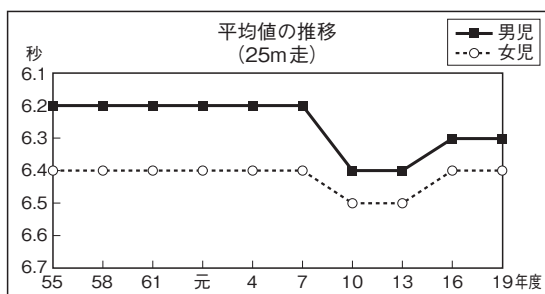
ここで注目したい比較調査がある。（グラフ3この調査は、平成16年度に実施したものである。）体支持持続時間について時計を見せるなど園児に目標をもたせ再度実施したところ、男女とも25秒前後タイムが伸びた、というものである。

心情（徳）に特化する調査は難しいが、この体支持持続時間のように、目標をもつという心情に働きかけたことが数値に影響することに注目したい。

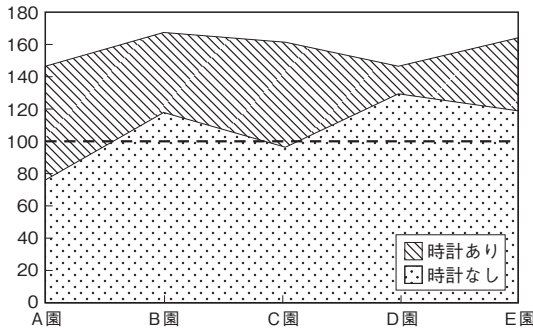
◇心情（徳）について

粘り強く取り組む気持ち、最後まであきらめない精神力、失敗しても気持ちを切り替えて再挑戦するなどの心のありようは、学力調査や運動能力調査の結果とも関連していることが推察できる。

今回の学習指導要領改訂において、すべての教科で「道徳教育の充実を図る」ことが総則及び各教科等に示された。このことは、「徳育」の重要性を改めて示したものとイえる。



グラフ2 5歳児の運動能力調査結果



グラフ3 体支持持続時間で時計を見せるなど励ましが園児に与える効果

教員には、子どもの多様な実態を把握し、その実態に応じた学習活動を進めることが求められている。子どもを知る努力を怠ってはならない。

3 学び続ける

学校には、地域や子どもの実態等を踏まえた教育目標が掲げられている。その多くは、「知徳体」に基づいた内容となっており、バランスよく育てることを大切にしている。

在職していた小学校の教育目標は、次の通りである。

- ・進んで学習する子
- ・なかよく助け合う子
- ・礼儀正しい子
- ・元気でしようぶな子

教育目標を実現させるためには、子どもたちを取り巻く様々な環境を整備することが求められる。つまり、この目標は、教員や保護者の目標でもあるといえる。

そこで、教員にはそれぞれの目標の「子」のところを「先生」と読み替え、指導する側にとっての目標であることを意識させた。

また、保護者に対しては「子」を「家族（家庭）」と読み替えてほしいと伝えた。「進んで学習する家庭（そうした環境作りをしてほしいということ）、なかよく助け合う家庭（子どもにもお手伝

いなどをさせ、互いに助け合う家庭）、礼儀正しい家庭（挨拶や返事など）、元気でしようぶな家庭（家族みんなが元気で健やかに生活すること）」である。

教員も保護者もともに「知徳体」のバランスある人間になることを生涯にわたって求め続ける目標としていきたいものである。

<目前心後 離見の見>

数年前に能楽協会の方々とは仕事をする機会に恵まれた。それ以来、能に興味をもち、能を鑑賞したり、世阿弥の能楽論集に目を通したりしている。

世阿弥の著書の一つ「花鏡」には、舞の心得として「目前心後」という一節がある。目を前方の観客の目を見て、心を後ろに置き、というものである。さらに、「離見の見」と言う見方、すなわち客観的な見方で自らを見ることを説いている。

自分の姿は自分では見るできない。教員としての成長は、人間としての成長である。一元的な見方ではなく、前からも後ろからも見ようとするなど視野を広げる努力を惜しんではならない。限られた時間を生きる中で最大限の努力をすることが教員として、人間としての営みであろう。自分自身も自らを客観視するための努力を積み重ねていこうと改めて決意している。

参考資料

- ・東京都教育委員会「東京都教員人材育成基本方針について」平成20年10月
- ・東京都教育委員会「OJTガイドライン」平成20年10月
- ・東京都教職員研修センター 平成20年度教員体系
- ・東京都教職員研修センター 平成19年度研究紀要「第10回東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究」
- ・東京都教職員研修センター 平成16年度研究紀要「第9回東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究」
- ・文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」H20.1.17
- ・文部科学省 学習指導要領（小学校・中学校）H20.3告示